

読みにおける状況の文脈の導入と語りの構造

上越教育大学学習臨床講座 松本 修

キーワード：読み 状況の文脈 語り メタ認知

1 研究の目的

文学テキストの読みにおける個々の読み手の解釈の形成のプロセスで、テキストの文脈と状況の文脈がリソースとなること、また、その文脈の導入に読み手のメタ認知がはたらくこと、そして、読みの交流活動において、リソースとして導入された文脈へのメタ認知的レベルからの言及があり、メタ認知的変容があるとき、交流が成立することなどを論じてきた。(松本2000, 2001, 2002b, 2003a, 2003b, 2004b, 2004c, 2005bなど)

この一連の研究は、文学テキストにおける〈語り〉にかかわる契機が、文学テキストへの読み手の働きかけの重要な鍵となっていることを明らかにすると同時に、そのような〈語り〉にかかわる契機が、読みの交流を促す上でのポイントを作ることで、個々の読み手の読みの個性を明らかにしていくことを明らかにしてきた。このことによって、〈語り〉への着目および〈語り〉をポイントとした読みの交流活動の学習過程デザイン上の有効性が示されたと考える。

ただし、部分テキストにおける〈語り〉にかかわる要素が、テキスト全体の語りの構造と密接に関わる事は理論上も学習過程上も重要な点であるにもかかわらず、テキスト全体のマクロ構造に対する学習者の認知が、具体的に学習者の中でどのようにはたらくのか、またそうしたことからへのメタ認知が読みの交流の中でどのように現れるのかについては、焦点化した検討はしてこなかった。

本研究は、そのうち特に読みを導入される状況の文脈とテキストのマクロ構造にかかわる語りの構造が、どのような関係を持ちつつ学習者に意識化されていくかについて、文学テキストをめぐる二つの話し合いプロトコルをデータとして検討したい。テキストの文脈にかかわる要素がテキストのマクロ構造に結びつく経緯は文学テキスト分析のレベルからも容易に推測できるが、読みの方略や個人の経験などにかかわる状況の文脈の導入において語りの構造がどのように関係するかはよく分からない点があるからである。

2 読みを導入される語りにかかわる状況の文脈

2.1 俳句をめぐる話し合いの事例

俳句「鬪鶏の眼つぶれて飼はれけり」(村上鬼城)の解釈をめぐる話し合いプロトコルから、読みを導入される状況の文脈が語りの構造に密接に関連している例を示す。

このプロトコルは、2005年6月9日 上越教育大学における講義「学習臨床学特論」の講義中において、話し合いデータの分析のための資料としてその場で行った読みの交流の話し合いの録音記録(ICレコーダーによる)をトランスクリプトしたものである⁴⁾。いずれも修士課程の学生5人(Sa, Im, ITO, Tu, St)が、それぞれの解釈文を作成した上で互いの解釈を提示しつつ話し合いを行っている。

次のような発話がある。

5 5 Im やっぱ思いやりって言うことの面から見ると、確かにね、たとえばこれ、もう、鬪鶏でどう、どうにもならない、//それだけど、でも、その鳥を作者の、あ、じゃねえ、飼い主の愛情が(2)救っているというかね、//2うん、そうもとれるのかなあ。ただ、これを見た(2)作者が、鬪鶏:っていうものが、ぱっと、わかるのか。(スー)(はっきりした呼気)

直前の箇所では、鬪鶏についての個々の読み手のイメージが十分に展開できず話し合いが行き詰まった傾向を見せ、4秒の沈黙がある。

ここでImは、「作者の、あ、じゃねえ、飼い主の愛情が」と自ら訂正しているように、作者(俳句テキストの読みの一般的特徴からするとほぼ語り手に一致)と飼い主を分けている。語り手が飼い主と一致するかどうかは、テキストそのものには書かれておらず、読み手が自らのイメージ化の中で状況の文脈を導入して補わなければならない情報である。個々の読み手は、それぞれ無意識であってもそうした情報を補っている

が、Imは言い間違えとその修正という形でその補った情報を提示している。「これを見た(2)作者が、鬮鶏：っていうものが、ぱっと、わかるのか。」と続けているように、鶏を見た語り手というものを想定して、飼い主は別にいるためその飼い主の愛情がそこから見て取れるのかどうかという疑問を提示している形である。

もともとこの俳句は、語り手が傍観的観察者なのか、鬮鶏の飼い主なのかという「要点」¹²を持っており、読みの分岐点¹³の一つとしてそれが機能する側面がある。飼い主と鬮鶏との関係をめぐって、「役目を終えた鬮鶏に天寿を全うさせるやさしさ」を読むか、「無惨な姿でなお酷使される鬮鶏のあわれさ」を読むかという読みの違いが現れやすい。鬮鶏の姿に他を睥睨するような威厳の残芒を見るか、残酷なまでの落魄を見るかという違いでもある。飼い主が語り手でもあるということになれば、無惨さあわれさを読む解釈は一貫性という点で成立しがたい。

Imは、語り手を観察者としているため、飼い主の愛情を読む解釈を可能性として持っており、その上で疑問を提示しているのである。Imは、語り手が飼い主をどう見るかという問題を、この後繰り返し提示している。

96 Im 飼われているのを(2)何か(3)んー、何だろなー(4)／／(4)作者その飼い主の思いみたいなのが、この飼われ(2)ているのを、こう第三者としての、こう、飼い主の思いを筆者がどう見てるかっていうと、飼われている鬮鶏を筆者がどう見てるかなっていうのを、今、この今、作った(。)ひっし、まあ、さくし：作者が、飼われている鬮鶏をどう見てるんだろう。

100 Im 大きくは、ま、最初の話に戻ってくると、片目を失いながらも、全うした、その、姿を間接的にとらえて、作者はどうとらえたか。または全うして、いない、まだまだ鬮い続けなければならないのを：作者はどう見たのか。またそこに加わるとこれと自分自身が重なってくるのか／／っていうとこだね。／／2° うん

このグループでは、鬮鶏の鶏どのような状況にあるのか、飼い主が思いやり・愛情を持っているのかという点をめぐって話し合いが展開しており、語り手の位

置や役割そのものを話題としては話し合いが展開していない。しかし、Imの語りの構造にかかわる発言によって、他のメンバーが何らかの影響を受けた可能性がある。

[この点については、「3 読みの交流における状況の文脈への言及」(当日資料参照)で検討したい。]

2.2 「走れメロス」をめぐる話し合いの事例

もう一つ、「走れメロス」をめぐる中学生の話し合いの学習のデータから読みに導入された状況の文脈で語りの構造にかかわる事例を扱う。

この授業データは、「走れメロス」(学校図書『中学校国語2』平成12年度版)を学習材として2002年2月22日から3月2日にかけて5時限で行われた上越教育大学附属中学校2年での授業のうち、第3時限(2月27日)におけるグループの話し合いのビデオデータをトランスクリプトしたものである。4人のグループで話し合いを行っているが、A「走れ! メロス。」というテキスト中盤の部分テキストと、B「塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。」というテキスト終盤の部分テキストについて、それぞれ「誰の声が聞こえるか」という学習課題に答え、それをめぐって話し合いが行われている¹⁴。

この話し合いに次のような発話がある。

12 YS Bの部分ですが、Bの部分、私はメロスだと考えました。で、あの、その「メロスは、今ほとんど全裸体であった、呼吸もできず、2度3度口から血が吹き出たっていう132ページの1行目は語り手の文章だと思います。これはメロスがなんとかだった。とか、メロスはこんな様子でしたっていうふうに、こう、客観的に見たっていうか、ちょっと高い視点から見た感じで、メロスの状態を表しているの、これは語り手の文章だろうと。(。)だけど、そのすぐ下にくる「みえる」っていうのは、あの、他の誰か見たわけでもなく、メロスが見えたわけで、そこがもし語り手の文章だったらメロスは見えていた、とか、メロスは見ていました。みたいな過去形で、しかも上から見たっていうか、自分のことじゃないようなふうになってると思うんですよ。そうするとこれは、語り手の文章ではなくて、あの、一緒に走ってたセリヌンティウスのおじさん(フィロストラトスの誤り)でもなくて、多分メロスのことであろうと、そうすると、その、見えるって、

その塔楼が夕日を受けてキラキラ光ってるって文も多分メロスのことではないでしょうか。と考えました。以上です。

24 TK 負けそうな自分に、こう、一生懸命呼びかけて、いるものなんだと思います。えーと、なんだ、ま、メロスだけに、こういう走れメロスという話だけにかかわらず、えっと、いろんな本に今まで、えーとその上に、例えば自分を励ます時とかなんか、あの、がんばれ私：：だとか、えーとなんだとかだとか、自分に呼びかけるようなことをよく、そういうシーンがよくあって、えーっと、あと、そういう130から131にかけて、えーと、んーと：：何だ？ えーと、私は信じられているとか、えーと、私の命などは問題ではないとか、そう自分にこう：：思っていることを言っているの、この、走れメロスというのも自分に対して、一生懸命呼びかけて走ろうと、頑張っているんだと思います。え：：、それからBは、Bもメロスだと思いました。えーと、何だ、P132の何だL1？ のえ：：、メロスはほとんど全裸体であったから、えー、はる、あ何だ、え、2行目の、2行目までえーと、その一二度三度口から血が吹き出たまでのところが一応根拠となる表現なんですが、まず、メロスは、そうそう走っていることが読みとれると思います。そして、この、2行目の見えるという言葉は、う？ 見えるという言葉？ と、そこまで、それはかっこのないメロスのまあ、言葉なんで、かっこがないだけで全部メロスの言葉ですね、まず。それで、えーと、そのあとに続く、その問題の「塔楼は夕日を受けてキラキラと光っている」は、メロスがこのクラ、クラ、ん？ シラクスの町を見て感じたことではないかと思ったので、えーこれは、あれ、語り手でもなく、あのメロス自身が感じて思ったことだと思います。はい、おしまい。

この学習では、学習者はあらかじめ二カ所の部分テキストにおいて「誰の声が聞こえるか？」という語りにかかわる学習課題を提示されており、その課題にかかわって、テキストの文脈、状況の文脈に言及するしかない。しかも単元の導入段階での学習において、学習者から出てきた「話者」「作者」概念を整理しつつ「語り手」の概念について指導を受けており、語りへの着目という学習の文脈は前提されている。

その条件のもとで、学習者は、解釈課題への自らの答えをめぐる、近傍の部分テキストや語りのマクロ構造にかかわる直観的把握などを引き出しつつ、物語内容ばかりではなく物語言説に関連づけてそれぞれの読みを説明している。このことによって読みの交流が促進されている側面がある。

[詳細については、当日資料で分析を示す。また、以下の2項についても当日資料を参照。]

3 読みの交流における状況の文脈への言及

4 状況の文脈の共有における語りの構造の意味

注

*1 トランスクリプトの形式は以下の通り。

- ・発話の単位は、間と内容（提題表現＋叙述表現）によって認定する。内容的に一連の発話は連続して記述する。
- ・発話には発話番号を付す。
- ・発話者をアルファベットで示す。
- ・漢字・平仮名・片仮名交じりで表記する。

記号

// 発話の重なり。直後の//の後の発話が重なっている。（//2は直後の//2の発話が重なる）
= 途切れのない発話のつながり。直後の=の後の発話がつながっている。

() 聞き取り不能。中に記述のある場合は、聞き取りが不完全で確定できない内容。

(3) 3秒の沈黙。

(.) 「、」で表記できないごく短い沈黙。

: : 直前の音がのびている。

- 直前の音が不完全なまま途切れている。

、 発話中の短い間。プロソディー上の何らかの区切りの表示を伴う。

? 語尾の上昇。

。 陳述の区切り。語尾の下降などのプロソディー上の区切りの表示を伴う。

_____ 下線部の音の強調（音の大きさ）。

° ° 間の音が小さい。

(()) 注記

以上の記述方法は以下を参照して定めた。

P・ザトラウスキー『日本語の談話の構造分析』くろしお出版 1993

- 西坂 仰『相互行為分析という視点』金子書房 1997
 好井裕明・山田富秋・西坂 仰『会話分析への招待』
 世界思想社 1999
 野村眞木夫『日本語のテキスト－関係・効果・様相』
 ひつじ書房 2000
 *2 松本 (2003a) 「読みの交流における話題と話し合
 いの様相」において、山元 (2002) をふまえて詳しく
 論じた。
 *3 松本 (2005c) 「読みの分岐点と読みの交流活動」
 において、鳴島 (1993) をふまえて論じた。
 *4 この授業における別のグループの発話記録につい
 ては、すでに松本 (2003a) 「読みの交流における話題
 と話し合いの様相」でデータとして分析を加えている。

文献

- 鳴島 甫 1993 「生徒の多様な読みを整理するた
 めの基礎研究－『羅生門』を例として－」『筑波大学学
 校教育論集』第16巻 1993.12 pp.159-170
 松本 修 2000 「ナラトロジーの役割－「山月記」
 を具体例として－」『読書科学』172 日本読書学会
 2000.7 pp.51-57
 松本 修 2001 「文学の読みとその交流の実践的意
 義」『国語科教育』第49集 全国大学国語教育学会 2
 001.3 pp.49-56
 松本 修 2002a 「「走れメロス」の語り」『宇大
 国語論究』13号 宇都宮大学国語教育学会 2002.2 pp.2
 7-39
 松本 修 2002b 「ナラトロジーと国語教育学研究」
 全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と
 展望』明治図書 2002.6 pp.479-486
 松本 修 2003a 「読みの交流における話題と話し合
 いの様相」『国語科教育』第54集 2003.9 pp.11-18
 松本 修 2003b 「「語り」に焦点化した読みの交流
 における話し合い活動の内容と形式」『Groupe Bricol
 age 紀要』No.21 Groupe Bricolage 2003.12. 28. pp.20-2
 9
 松本 修 2004a 「国語科教育研究における話し合い
 プロトコルの質的三層分析」『臨床教科教育学会誌』
 第3巻第1号 臨床教科教育学会 2004.6 pp.74-82
 2004.10 pp.86-94
 松本 修 2004b 「読みに導入される子どもの文脈と
 その交流」『月刊国語教育研究』 日本国語教育学会
 2004.12 pp.4-9
 松本 修 2004c 「まど・みちおの詩を読む－生きる
 こととしての読みとその交流－」『Groupe Bricolage
 紀要』No.22 2004.12 pp.19-32
 松本 修 2005a 「「高瀬舟」の語り」『日本語と日
 本文学』40号 筑波大学国語国文学会 2005.2 pp.1-1
 2
 松本 修 2005b 「状況の文脈を資源とした読みとそ
 の交流の可能性」『国語科教育』第58集 掲載予定 全
 国大学国語教育学会 2005.9 (全国大学国語教育学会
 第107回大会自由研究発表に基づく)
 松本 修 2005c 「読みの分岐点と読みの交流活動」
 『表現研究』第82号 2005.10掲載予定
 松本 修・桃原千英子 2004 「「ブラジルおじいの
 酒」における語りの重層性と読みの形成－教材化研究
 の視点から－」『表現研究』第80号 pp.86-94
 山元隆春 2002 「コミュニケーション行為としての
 文学教育」『国語科教育研究』全国大学国語教育学会
 第103回大会研究発表要旨集 および当日資料
 山元隆春 2005 『文学教育基礎論の構築－読者反応
 を核としたリテラシー実践に向けて』 溪水社
 Douglas Vipond, Russel A. Hunt 1984 "Point-Driven U
 nderstanding: Pragmatic and Cognitive Dimensions of Lier
 ary Reading", *Poetics*, 13

(上越教育大学 学習臨床講座)